

身体の言語性

How our body can be language

坂井田 瑠衣^{*1,2}
Rui Sakaida

^{*1} 日本学術振興会
Japan Society for the Promotion of Science

^{*2} 慶應義塾大学環境情報学部
Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

In this paper, I discuss how our body can be language in social interaction. It is demonstrated that body movements which do not orient to conversational organization can solicit a particular response from his/her co-participant, and add a situated implication to the co-occurring vocal utterance.

1. 身体の言語性

人々の共在状況において互いに観察可能となる身体は、しばしば言語的な性質を帯び、会話相互行為の資源となる。手指動作を中心に構成される手話言語は言語そのものである[木村 14]、聴者同士の相互行為においても、音声言語の表現を支えるジェスチャー[喜多 02]、次の話者を指示する視線[榎本 11]、感情を表現する表情[Ekman 78]など、多様な身体的モダリティが会話相互行為を補足する役割を担っている。

他方で、共在状況において他者とともに展開されるのは、会話相互行為だけではない。生活の様々な場面において、我々は様々な活動を他者とともに展開する。そこでは、一見すると言語的でない、すなわち何らかの意味の伝達を目的としていない身体行動を互いに観察しあうことで、活動が相互行為的に展開される[坂井田 15]。本稿では、そのような身体行動が言語的な性質を持ちうるかを検討していく。

2. 活動への関与と相互行為への参与

我々は共在 (co-presence) 状態において、他者との会話相互行為に参与 (participate) している[Goodwin 04]だけでなく、しばしば場面にかかわりのある活動 (occasioned activities) に関与 (involve) している[Goffman 63]。例えば食事しながら会話している場面において、我々は会話に参与しているだけでなく、食事という活動に関与している。食事会話のような場面では、(食事という) 個人的な活動と(会話という) 共同的な活動をいかにして両立するかが問題になる[Haddington 14]。

それに対し、例えば医療や介護、制作などの活動が共同的に行われる場面では、互いの身体行動を観察しあい、自らに必要と思われる行動を繰り出すことにより、活動が相互行為的に展開する[坂井田 15]。そのような場面では、場面にかかわりのある活動に適切に関与するための手段として、我々は身体的な相互行為に参与していると捉えられる。そこでは、例えば身振りや視線配布などの会話を展開するための身体行動だけでなく、作業上の動作や移動のための歩行など、会話以外の活動を展開するための行動、すなわち会話外行動 (non-conversational behavior)[坂井田 17]が相互行為資源として利用される。

3. 構造的な伝達と状況依存的な見立て

会話外行動が相互行為資源として利用される過程において、我々の身体にはいかなる言語的な性質が生じるのだろうか。言

語を中心とした会話相互行為においては、語彙や統語構造、順番交替の組織[Sacks 74]や連鎖の組織[Schegloff 07]により、ある程度は個別的な文脈に依存しない構造的な伝達可能性が担保されている。会話を補足する身体行動についても、多くの身振りが身体表現 (body idioms) として慣習化されており[Goffman 63]、視線を向けられた聞き手が優先的に次の話し手になる[榎本 11]など、しばしば構造化された側面を持つ。それに対し、会話外行動は少なくとも一義的には意味伝達のために構造化されていないため、互いの行動に対して状況依存的に (situatedly) 意味を見立てることも必要となる[坂井田 17]。

4. 状況に埋め込まれた言語性

本稿では、ある短い断片を手がかりに、会話外行動が帯びうる言語性的一端を検討する。ただしその言語性は、あくまでも特定の社会的場面における個別的な状況がもたらすものである。

これは歯科医師 (D) が患者 (P) に対して P の口内の状態を説明しつつ、デンタルミラーを P の口に近づけて診察を開始しようとしているやりとり[坂井田 16]である。「[]」は重なり開始地点、「言葉::」は音の引き延ばし、「(言葉)」は聞き取りが確定できない発語、「(())」は非言語行動、「+」は D の右手動作の変化点、「*」は P の開口動作の変化点、「->」は同一動作の継続を示す。

```
01 D: あの::: 飲み込んだの
02     たぶん 1日半ぐらいは(や)で
03     下から出てきとるで、
04 P: +(nod)
      d: +ミラーを持ち上げる->
05 D: まあほかっ+てっ*てい#い[け+ど:]
06 P: [((nod))
      d: ----->+ミラーを接近->+ミラーを挿入
      p: *口を開く
```

D は P が受診の数日前に飲み込んでしまったという被せ物が、既に排泄されてしまっているであろうという状況を教示している (01-05 行目)。それと同時に、D は P の口にミラーを近づける (05 行目)。これらの D の行動に対し、P は口を開いてミラーを受け入れつつ、頷くことによって説明を受け入れる (06 行目)。ここで、「D が P の口にデンタルミラーを近づける」という会話外行動は、「特定の反応を要求する」、「言語的発話を連鎖上に意味づける」という 2 点において、言語的な性質を帯びていると考えられる。

4.1 特定の反応を要求する

相互行為において、言語はしばしば、相手に特定の反応を要求する。隣接ペア (adjacency pair)[Schegloff 73]と呼ばれる連

鎖組織がその一例である。歯科医師が患者の口にミラーを近づけ、患者がそれに応じて口を開くことは、隣接ペアが、歯科診療場面に特有のやり方で身体的に構成されているものと見ることができよう。

隣接ペアとは、(1) 二つの発言順番から成り、(2) 異なる話し手によって産出され、(3) 隣り合って配置され、(4) 第一成分 (first-pair part) が第二成分 (second-pair part) に先行し、(5) 特定の第一成分が特定の第二成分を呼び出す、という特性を持つ発言順番の連鎖組織である。この中で、隣接ペアの議論において特に重要なのは、「特定の第一成分が特定の第二成分を呼び出す」という性質、すなわち条件的関連性 (conditional relevance)[Schegloff 68]である。例えば「質問」という第一成分は、「応答」という特定の第二成分を呼び出す。

歯科医師が患者の口にミラーを近づけるという第一成分が、患者が口を開けるという特定の第二成分を要求することは疑いない。言語的発言の隣接ペア第一成分と同様に、相手に対して特定の反応を要求しているという点で、歯科医師がミラーを近づけるという会話外行動は言語的な性質を帯びていると考えることが可能である。

ただし、ここでの条件的関連性は、成員カテゴリー、用いられる器具の特性や身体配置など、あくまでも歯科診療に特有の社会的背景や物理的状況に裏付けられたものとして理解する必要がある。まず、ミラーを近づけるのは、当然ながら歯科医師(あるいは歯科衛生士)でなければならない。歯科医師は、歯科医師という特定の成員カテゴリー[Sacks 92]に帰属する権利と責任のもとに、患者の口にミラーを近づけるという隣接ペア第一成分を発動することができる。さらに、診療台の上で仰向けになっている患者の顔を歯科医師が覗き込むという身体配置において、デンタルミラーという先鋭的な診療器具が口の方向に近づけられるからこそ、患者はその行動に対していかなる反応をすべきかを容易に推論できる。たとえデンタルミラーがどのような診療器具かを知らなかったとしても、歯科医師が患者の口内を診察するのに適切な姿勢を取っていることは、歯科医師がこれから診察を始めようとしているという推論を可能にし、デンタルミラーの先の尖った形状は、それが口内の診察に用いる器具であるという推論を可能にする。

このように、「歯科医師が患者の口にミラーを近づける」という行動には、一見すると「患者に口を開くことを要求する」という意味が付与されていることが自明であるものの、実際にはその言語性は、歯科診療を取り巻く社会的背景や物理的状況に裏付けられて初めて生じるものである。

4.2 言語的発言を連鎖上に意味づける

身体行動は、共起している言語的発言を相互行為連鎖上に意味づけるという点で言語性を帯びることもある。言語的発言を意味づける身体行動として典型的なのは、指示詞に伴う指さし[Goodwin 03]である。「これ」と言いながら特定の対象物を指さすことで、「これ」が指しているのは指の先の対象物であるという意味を決定づけることができる。

本稿の断片においても、歯科医師が患者に教示を与えながらデンタルミラーを近づけることは、その教示発言を意味づけていると捉えられる。歯科医師は「あの:: 飲み込んだの たぶん n 1 日半ぐらいははず(や)で 下から出てきとるで。」と発言した後、デンタルミラーを持ち上げながら、「まあほかつ」と発言する。その後、歯科医師がミラーの軌道を変えて患者の口に近づけつつ、「てっ」と発言を続けたところで、患者は口を開く。歯科医師の一連の行動は、患者の診察を開始しようとしていることを示すと同時に、患者に対する教示発言を終了しようとしていることをも示

している。つまり患者には、歯科医師の教示が間もなく終了するため、それに対して反応を示すべきタイミングが訪れることも示唆される。実際、患者は歯科医師の発言が完全に完了する前に口を開いたまま頷くことで (06 行目)、歯科医師に教示の受け入れという適切な反応を示すことが可能になっている。歯科医師の発言が実際に完了するのを待っていたならば、その間に口内にミラーが挿入されてしまうため、頷くタイミングを逸していただろう。

「デンタルミラーを患者の口に近づける」という会話外行動が、歯科医師の発言の連鎖上の意味(まもなく発言が終了すること)を決定づけ、歯科医師と患者の言語的やり取りを適切に促したという点で、ここでの会話外行動は言語性を帯びていると考えることができる。

5. まとめ

会話とは異なる活動を展開するための身体行動、すなわち会話外行動も、ある種の言語性を帯びることが示唆された。身体がいかなる言語性を帯びているかという問題は、会話を展開するための身体行動だけでなく、会話外行動にまでその対象を広げて議論すべきである。同時に、会話外行動は場面にかかわりのある活動に関与する際に用いられるため、その言語性も個別具体的な状況に埋め込まれたものとして理解する必要がある。

参考文献

- [Ekman 78] Ekman, P.: Facial signs: Facts, fantasies, and possibilities, In Sebeok, T. (Ed.), *Sight, Sound and Sense*, pp. 124–156. Indiana University Press. (1987)
- [榎本 11] 榎本美香, 伝康晴: 話し手の視線の向け先は次話者になるか, *社会言語科学*, Vol. 14, No. 1, pp. 97–109 (2011)
- [Goffman 63] Goffman, E.: *Behavior in Public Places: Notes on the Organization of Gatherings*, Free Press (1963)
- [Goodwin 03] Goodwin, C.: Pointing as situated practice. In Kita, S. (Ed.), *Pointing: Where Language, Culture, and Cognition Meet*, pp. 217–242. Lawrence Erlbaum (2003)
- [Goodwin 04] Goodwin, C. & Goodwin, M. H.: Participation, In Duranti, A. (Ed.), *A Companion to Linguistic Anthropology*, pp. 222–244. Blackwell (2004)
- [Haddington 14] Haddington, P., Keisanen, T., Mondada, L. & Neville, M. (Eds.): *Multiactivity in Social Interaction: Beyond Multitasking*, John Benjamins Publishing Company (2014)
- [木村 14] 木村晴美, 市田泰弘: 改訂新版 はじめての手話: 初歩からやさしく学べる手話の本, 生活書院 (2014)
- [喜多 02] 喜多壮太郎: ジェスチャー: 考えるからだ, 金子書房 (2002)
- [Sacks 74] Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G.: A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation, *Language*, Vol. 50, No. 4, pp. 696–735 (1974)
- [Sacks 92] Sacks, H.: *Lectures on Conversation*. Blackwell (1992)
- [坂井田 15] 坂井田瑠衣, 諏訪正樹: 身体の観察可能性がもたらす協同調理場面の相互行為: 「暗黙的協同」の組織化プロセス, *認知科学*, Vol. 22, No. 1, pp. 110–125 (2015)
- [坂井田 16] 坂井田瑠衣, 諏訪正樹: 受け手になるか対象物になるか: 歯科診療における参与地位の拮抗と相互調整, *社会言語科学*, Vol. 19, No. 1, pp. 70–86 (2016)
- [坂井田 17] 坂井田瑠衣: 相互行為としてのマルチモーダル・アクティビティ: 多重に絡みあう身体時空間資源の即興的利用, 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 2016 年度博士論文 (2017)
- [Schegloff 68] Schegloff, E. A.: Sequencing in conversational openings. *American Anthropologist*, Vol. 70, No. 6, pp. 1075–1095 (1968)
- [Schegloff 73] Schegloff, E. A. & Sacks, H.: Opening up closings. *Semiotica*, Vol. 8, pp. 289–327 (1973)
- [Schegloff 07] Schegloff, E. A.: *Sequence Organization in Interaction, A Primer in Conversation Analysis*, 1, Cambridge University Press (2007)